



### 『オデュッセイア』

ホメロス 著、

松平 千秋 訳、岩波文庫

上床 真理子 (学部一年生)

トロイア戦争終結後、戦いに勝利した英雄でイタケの王オデュッセウスが、故国へ凱旋する途中でさまざまな苦難に遭う。怪物と戦い、仲間を失い、十年にわたる英雄の漂泊と冒険を描いた長編叙事詩。彼の息子であるテレマコスが父親を捜す旅も展開され、終盤は、王の不在中に妃ペネロペに言い寄った求婚者たちへのオデュッセウスの報復劇で締めくくられる。「イリアス」の続編と言われるが、話自体は独立している。

古典は堅苦しくてつまらないものと思ってしまうか？これはそんなイメージを覆してくれる作品です。長い話ですが、細かいところを読み飛ばしても十分楽しめるし、注釈もついているので安心して読めます。読後の爽快感は何とも言えません。特にファンタジー好きの人に薦めたい一冊です。



### 『青春攻略本』

あきづき 空太 著、白泉社

鈴木 久美子 (学部一年生)

男子高校に通う四人の高校生の青春を描いた物語。

恋に、友情に悩みながらも、友達の手紙に背中を突き飛ばされて走り出す彼らの日常は、その時その時にしか出来ないことの大切さを思い出させます。

高校生の頃に感じてた疾走感。向こう見ずでバカな楽しさ。ふとよぎる寂しい気持ち。色んなことが思い出されて、胸がいっぱいになります。



私はこれを読んで、高校最後の文化祭に川原で毎日劇の練習をしたこと、夏休みに部活で風に吹かれていた美術室のにおい、受験勉強の途中でふと自分一人の教室から窓の外を眺めたこと……たくさんの思い出が胸を駆け巡って、切ないような、幸せなような、居ても立ってもいられない気持ちになりました。

これを読めば、きっと高校生に戻りたくなるはず！

### 『インパラの朝』

中村 安希 著、集英社

栗栖 千尋 (学部一年生)

読了後、旅に出たくなります。世界を知りたくなります。筆者が2年間、1人きりで旅をしたのはアフリカや中東。そこには、きらびやかな欧米の国々とは違い、質素で、素朴な世界がありました。見知らぬ旅人を受け入れてくれる現地の人々の暖かさや、何の見返りもなく旅人の面倒を見てくれた家族の優しさ。かと思えば、旅人の食事を、我が物顔で一緒に食べる現地の人。日本では簡単に経験できない

ような人と人とのふれあいが広がっていました。なんて世界は広いんだろう。そう思わずにはいられません。

世界はグローバル化し、多様な国の文化に触れる機会は増えています。今までも中東やアフリカに興味なかった人もこの本をきっかけに、目を向け、耳を傾けてみてはどうでしょうか。これまで見えてこなかった世界の姿が見えてくるかもしれません。



## 『サクリファイイス』

近藤 史恵 著、新潮社

岡添 りえ（学部一年生）

「どんなスポーツでも勝たなきゃプロとしてやっていけない。だけど、自転車は違う。自分が勝たなくても、走る事ができる。」

ロードレースにおいて、アシストは自分のゴールではなく、エースのゴールのために走る。それはエースのタイヤがパンクすれば、自分のものを差し出して先に行かせるような、捨て駒のような仕事。でもアシストたちの「犠牲」の上にチームの勝利がある。

サクリファイイスはロードレースを題材にしたミステリー小説です。

アシストの仕事を全うするか、あくまで自分の勝ちを狙いに行くかで葛藤する主人公。ツール・ド・ジャポンを通して自分の走りかたを自覚していく。そんな中起こったリエージュ・ルクセンブルクでの惨劇。

怒涛の展開に引き込まれること間違いないです。



## 『ジャパン・スマイル』

川上 健一 著、PHP 研究所

高松 方子（学部一年生）

見開き一ページの中にぎゅつと込められた、日常に隠れている小さな幸せのワンシーンが一〇一編。読み進んでいくにつれて、文中の出来事が自分の幼い頃の思い出や家族、古い友達との思い出とリンクしてどこか懐かしく、胸がほっこりします。私の特にお気に入りには、「一番ほしいもの」というお話。春から小学生になる女の子が、単身赴任中でなかなか会えないお父さんから入学祝いにほしいものを聞かれ、ねだったもの……。

お父さん目線で書かれているからおさら、女の子のまっすぐで幼気な気持ちが伝わってきます。

「眠い」「疲れた」が口癖になっていく毎日ですが、ちよつと見方を変えるだけでこんなに幸せが、笑顔になれる理由がそばにある。よく聞くフレーズですが、素直にそう感じさせてくれる、本当にだいすきな一冊です。



## 『聖女の救済』

東野 圭吾 著、文藝春秋

田中里奈（学部一年生）

資産家の男、真柴義孝の妻、綾音が主催するパッチワーク教室の講師をしている若山宏美が、自宅で殺されている義孝をみつける。死因は毒殺である。捜査にあたった草薙刑事は綾音に惹かれてしまう。一方、内海刑事は綾音の

犯行ではないかと疑い、このことから、草薙と内海は対立してしまう。しかし、綾音には鉄壁のアリバイがあり、そのトリックを解くため、内海は湯川教授に協力を申し出る。湯川が出した答え

は理論上ありえても、実践するのはとても困難な驚愕のものであった。

この作品は、草薙と内海が別の視点から捜査をしていきます。そして、誰が犯人なのか、どうやって義孝を殺したのか、最後までわかりません。何ら関係のないようなものがつながつて事件は解決に向かいます。自分も一緒に推理をしていってしまおう、おもしろい作品です。



## 『秘密』

東野 圭吾 著、文藝春秋

安田 香穂（学部一年生）

バスに乗りしていた母・直子と娘・藻奈美は転落事故に巻き込まれてしまう。直子の葬儀の後に、意識を取り戻した藻奈美であったが、その体に宿っていたのは直子の魂であった。その日から、父・平介と、娘の外見をした妻・直子の「秘密」の生活が始まる。

この本では、娘として生きる直子と、娘として妻に接しなければならぬ平介の葛藤を読み取ることができる。二人は接し方が分からず何度ももめるが、

そのたびにお互いの大切さとかかりがたさなどに気付いていく。何年か経って、急に藻奈美の魂が生き返り、直子がだんだんと消えていってしまっている。最後には完全に藻奈美に戻る。これはただのミステリー小説ではなく、一冊の小説として何度も読んでしまおうお気に入りの一冊です。

